

十月二七日

山本夏彦さんがどうやら亡くなったようだ。八十七才だった。娘がインターネットニュースで知り知らせてくれた。昨夜御親族だけですでに葬儀はすませていると言つ。二三日に亡くなつていたのだと言つ。

いつの間にか亡くなつていたようだ、が実感だ。いかにも山本夏彦さんらしいと思つた。昨年の晩秋にお目にかかったのが最後になつてしまつたが、山本さんに関してはお目にかかるうが、かかるまいが、お目にかかつていようが会わずにいようが、それはどちらでも良い事のように思う。翁は生きていた時からすでに死んでいる人のような趣があつた。

この人物の事は「ずーっとむかし生まれた人」と題した文章が「現代の職人」晶文社（一九九一年）に収録されているのでもう繰り返さない。現代の職人は私の何冊かの本の中でも、自分が一番出ている本で、これは山本夏彦さんが発行編集人を生涯つとめた雑誌「室内」に一九八五年から連載させていただいたいのモノをまとめたものだ。光栄な事にこの本の巻頭には山本さんの「推挽」があり、小さな石山論になっている。稀代のコラムニストの文である。数行で私を言い当てている。言い当てられた私はもじもじするしかないが、建築家という職業の正体も同時に言い当てているので私は救われてもいる。

山本夏彦さんは私の文章の師匠であつた。私の文章が今少しは

読みやすくなつてきているのは二人の編集者のお陰様である。一人は津野海太郎であり、彼は俗な建築家特有の漢字難字の多い気取つた文章を嫌つて「ひらがなに開け」と教えてくれた。以前の私なら、教えてくれたと書かずに教示されたと書いたであろう。啓示教訓を得たなんて書いて悦に入つていたかも知れない。

山本夏彦さんは更に辛らつであつた。原稿を何度も突き返してきた。私の文章の勉強は四十を過ぎてからだつた。四十を過ぎてくればどんな凡愚でも、平凡は平凡なりの我が育つてきている。他人の意見を簡単には聞けなくなつてきているのが通常だ。漢字をひらがなに開くどころの話ではなく、心を他人に開くことが出来にくくなつてくる。

しかし山本さんの指摘はいちいち、ごもつともで私は歯ざしりしながらも言う通りに従つた。つまり頭を下げたのである。世の中には敵わぬ人が居るのを知つたのだ。

山本夏彦は戦後の日本人の気持ちの働かせ方に厳しかった。戦前十五の時に無想庵に連れられてパリで学び生活した人である。すでにその頃から日本と日本人を客観視せざるを得ない眼を養いつつてきたのだ。日本人はニセ毛唐になつた。というのが山本夏彦が作家として、コラムニストとして到達した結晶の一行である。司馬遼太郎さんの晩年の発言も大方それに近いものになつたのを思い起こす。山本さんは繰り返し繰り返しその事を言い続け、次第に深みにはまり、それ故にそのコラムは凄みを帯びた。凄みを帯びると、それは時に他人を傷つけることになり兼ねぬが、山本さんはそれを笑いにも昇華させた。

旅をしない人、出掛けぬ人としても知られていた。何の用があつて月まで行くんだと言つ山本さんのつばやきも知られているが、山本さんは人類平和希望愛と言つような、アポロ十号の月面着陸

に連がるような考えが嫌いだった。その平板さを疑っていた。その平板さを又ケ又ケと言うアイダミツオのような人間を嫌った。その通俗さを突き、破壊する山本さんの口振り、手つきを私は好きだった。旅をしてもロバはロバのままだ。翁の名句の一つだが、自分に刺さる言葉でありながら、赤面しながらも好きであった。好きだナアと思っているうちに、何だか真似をしている自分に気が付くようになった。友人から文章の組み合わせが似てきてるぞ、と指摘され、嬉しいような、悲しいような気分には落ち入った事もある。

山本さんが亡くなった事を知り、いづれは亡くなるだろうと考えていたから、それ程のショックはあるまいと、淡々と受け止められるだろうと考えていた。しかし、時が経つにつれて悲しさが襲って来て、その事に自分で驚いている。その悲しさは人間の常の別離のそれでもあるが、もう少し深い別れでもある。これから先の時間、あのような人格物腰に二度と会えぬだろうという確信が深まる、それだからやってくる悲しみだからなのだ。こういうもって回った言い方を山本さんは嫌がった。文章には人間が表れるから、自分でも、これじゃ人間ごと突き返されるぜと力も無い。戦後日本の文化風俗をほとんど文化人類学的にコラムという手段で追求し続けるような人物はもう二度と出ない。それが辛い。

ショックを薄めようとして、こんな駄文を書いてはいるが、段々悲しくなってきた。もう止めよう。

あんな桁外れのお化け、明るいモンスターに会い、教えてもらえた事だけでも幸運であったと言っしかない。